



日本生まれのアメリカ人・チェリン・グラック監督、唐沢寿明主演による東宝映画「杉原千畝」を見ました。杉原千畝(1900-1986)は日本の外交官、官僚です。このタイトルの上に、もう一つのタイトル“Persona non grata”が重ねられていました。ペルソナ・ノン・グラータ(ラテン語)とは、「好ましくない人物」を意味する、外交用語の一つのことです。杉原氏

は旧満州での諜報活動により、ソ連からこの指定を受け、入国を拒否されました。左遷され、リトアニア領事館の副領事として着任していきました。

当初、旧満州で、杉原氏は人間的な信頼関係をもって情報を得ていましたが、関東軍の拡大主義、暴力主義、民族差別によって関係を圧殺され、嫌気がさしていました。けれども、そんな世界を変えたいという夢を持ち、外交官として働き続けました。外務省も、出世主義、事なかれ主義でした。また、台頭するナチズムの実態を知るよりも、勢いに目を奪われ、日独伊の三国同盟に縋って、安泰を図りたいのが政府側の姿勢であり、杉原氏の思いは受け入れられません。そして、この世界情勢の中で杉原氏の諜報による調査、展望は抹殺されていきました。関東軍にしる、ナチスにしる、武力に頼る者が権力を持つと、いかに、狂気に走り、凶暴になるか、恐ろしいまでに描かれています。

映画では、旧満州の哈爾濱においても、リトアニアの領事となっても、杉原氏の諜報活動は酒場からスタートしているように描かれているのは驚きでした。本国との通信も暗号を頼るしかなく、外交官同士の交際によって得る情報は建前であり、表面的であり、社交的、欺瞞的であるでしょう。信頼できる人間関係や確かな事実の裏付けから、推移していく情勢を見極める必要があると思いますが、それが本当に貧弱に描かれているのが不思議です。また、哈爾濱でのロシア人女性との関係が、一見、情婦かのように



に描かれていましたが、そのような「カモフラージュ」も必要だったのでしょうか。特に教会の中で会うシーンなどは、教会をも利用したのだろうか、思わずにいられません。実際には杉原氏は早稲田大学時代からキリスト教に関心を寄せ、満州時代にギリシャ正教会で洗礼を受け、キリスト教信仰を持って生きた人物だということです。

杉原氏は日本という小国が植民地主義、軍国主義に進むことは無謀であるという、時代をはっきりと見据えた冷静さをもって、上司に提言しますが、当時の駐独大使大島浩はナチス支持者です。ひとたび「ペルソナ・イン・グラータ」と刻印された一介の役人は政府にとっても無用の存在でした。世界は独ソ対戦が予測され、その狭間の東ヨーロッパに住むユダヤ人は、行き場を失いました。ユダヤ人への残酷な排斥、また、殺害が激しさを増していました。ユダヤ人はヨーロッパには向かえず、シベリア鉄道で東へ向かい日本を経由してアメリカなどへ逃亡するしかなかったのです。リトアニア領事館にユダヤ人はビザを求めて押し寄せて来ました。杉原氏は「世界を変えたい」という願いをもって、外交の世界に飛び込んだのですから、人間性を失った世界を変えるために、ユダヤ人に偽のビザを発給する決意をしたのです。とうとう1939年に、政府の訓命に反して、独断で、人道的見地から、カリブ海にあるオランダ領地のキュラソー行きのビザを発行したのです。それは外交官としては不名誉な行為でした。けれども彼を心から信頼する明朗な妻の支えもあり、領事館閉鎖になるまでビザを出し続けました。誠実に生きたいと願って、そのため全てを失うことも覚悟して「キュラソー・ビザ」を出しました。敗戦となり、彼は免職となり、切り捨てられました。杉原氏の出した「命のビザ」によって、家族も含め 6000 人以上のユダヤ人が救われ、杉原氏の名誉は回復されました。一方、日本はあの戦争の不名誉をいまだに引きずって問題を起こし、日本人として残念でなりません。